

# 透物語

ぎゅうにく

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

浅倉透が中学までバスケをやつていた世界線、2人の「透」のお話  
ノクチルにもう一人男の子の幼なじみがいて、浅倉透と一緒にバスケを始め、アイド  
ルになつた浅倉透と再会するIF二次小説、なお天塵後。

一応ハーメルン初投稿、pixivからの輸入です。

PCが読みやすいですが、スマホなら横画面でお読み下さい。

目

次

三 章	二 章	二 章	二 章	一 章	一 章	一 章	一 章	一 章	一 章	
1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
89	81	74	67	60	52	41	32	21	12	1



# 一章 1話

一章 ニュアンステーマ n a n o . R I P E 「ノクチルカ」

## 1話

ぼくにとつて”どおるくん”はだいじなともだち

それはきっとずつとかわらない

だつて”どおるくん”といふと、いつだつて毎日がキレイなんだ  
なんだろう

目の前はカラフルなのに、ずっと遠くまで見えてるみたいな、そんなふしぎな感じ  
だから一緒にいたいって思うんだ

思つてたんだ

もしかしたらそれは私の方だけだつたのかもしない

それならそれでいいけど

もしも、この入部届けに名前を書いて…キミの所まで私を連れてつてくれたりしたら  
おもしろい、よね――

会場に着いてすることと言えば学校への挨拶、それから体育館への挨拶だ。  
キャプテンの号令に従つて全員が荷物をその場に下ろし、声をそろえる。

「「「よろしくお願ひします!!」」

選手が試合をするために最も必要なものは場所だ。

練習ならボール一つあればいい、10on1なら二人いればいい。

だけど試合をするなら2つのゴールとラインの引かれたコートも必要だ。

それを用意し選手に貸してくれている学校に黙つて入つていくなんてスポーツ選手

のすることじゃない。

そんな精神を入部から叩き込まれた俺たちは、半ば作業のように荷物を持ち上げて高校の敷地内へと入つていく。

「あれ、お前今日スタートからだつけ?」

「いや後半から。ぶつちやけ桂さんがミスんなきや出番ないかも」

アスファルトの照り返しが直に顔に突き刺さる。

出番が無いなら別会場の偵察に回してほしかつたが、一軍に入れてもらつている以上そんな自分勝手なことは言えない。

この背番号には一軍に入れなかつた仲間たちの悔しさが乗つかつてているのだから。

「今日はいけるつしょ。別になめてるわけじやねーけど、向こうの今までの見た感じはうちがキツイ展開にはなんねーって監督言つてたし」

「わかんないだろ、急にキヤプテンが足攣つたりしたらどうすんだ。お前のとこチエック厳しくなるんじやないのか?」

体育館前に整列し、キャプテンの号令で揃って挨拶を済ませる。

外履きを綺麗に揃えたやつから、選手たちの更衣室兼食堂兼控室の空き教室につながる渡り廊下へ進んでいく。

「キャプテンそんなバカやんねーだろ：てか3番ポジションなら今田さんもいるし、俺がスリー狙つとくのが一番プレッシャーになるだろ？」

「ずっと練習してたドライブは試さないのか？」

「あんな公式戦でやつたらAチーム下ろされるわ！監督も俺が練習してんのなんか知らねーだろうし」

「そういうとこ見逃すような監督だとは思わないな、鬼畜だけど」

「俺らを今から試合に出してんのとかも先を見据えてだろうな、鬼畜だけど」

各々アップに備えて荷物を準備する。

まだインハイ予選だからアップ用のコートなんてものは当然無いので、この照りつける日差しの中で体を慣らさないといけない。

誰だつて汗まみれのユニで試合なんか出たくない、皆ユニフォームを試合用の荷物袋

に入れてアップ用のウェアに着替える。

「ん？紺野お前スポドリ一本で足りるのか？今日ガツツリ出るんだろ？」

「あ…やっぱ！自販機で買ってねーわ！家に余つてたやつ持つて来てこつちで買うつも  
り：ストレッチ終わるまでに戻つてくるからキャプテンに言つといて！」

「はいはい、さつさと戻つてこいよ」

財布を手に校内の自販機を探しに行つたようだ。

ここに来るまでに見た自販機なら：グラウンド脇に確かあつたが、そこまで行くなら  
しばらくは戻つてこないだろう。

試合の準備をしているキャプテンに伝えに行こう。

「中村先輩」

「ん、どうした久我？」

「紺野がスパドリ追加で買いに行つたので、戻つて来るまでストレッチはソロメニュー  
をやつてもいいですか？」

「あいつ…別に俺にひとこと言つてから行けばいいのに：わかつた、お前は今日は出場

時間が短いかもしれないけど、怪我しないようにきちんと伸ばしておけよ」  
「はい、わかりました」

紺野が見切り発車なのは誰もが諦めて受け入れている。キャプテンもいつもの事なので特に怒ることもなく、俺は一人でストレッチを進める許可をもらえた。

あいつのああいう所は良くも悪くも性格なんだなあと常日頃、プレー中も感じる。思いつき、それが最善と確信した瞬間に一直線、後は後で考える…それが硬直した試合展開を動かす起爆剤にもなるし、起死回生的好プレーにもなる。もちろんうちが掴んでいた流れを崩してしまう悪手にもなり得るが、それでも一軍であるAチームでスタートから出しているという事は、監督はその試合を動かす勢いを生み出す始点として紺野の力を認めているんだろう。

先輩方と外に向かい、脇にスボドリを置いて一人で柔軟を始める。

散々出番は少ないとは言わっても、いざ名前を呼ばれた時に自分の空気を瞬時にゲー

ムに合わせられないようではこのユニフォームを託される資格はない。  
いつもと同じように：徐々に体の各部分のスイッチを入れていく。

セミが鳴いている

今日の相手は特別うちの壁にはならないだろうというのは全員が思っているし、事実だ。

それでも俺はいつも通りのパフォーマンスを出せるように準備を怠らない。  
それは選手として当たり前だ。

セミが騒がしい

さつき紺野と話したように、もしかしたら同じポジションの桂さんがミスをして、俺の出番が来るかもしれない。

もしかしたらキャプテンが怪我をして俺もゴールを狙いに行くことになるかもしれない。

だからこうやつて蒸した熱の中でも試合の展開を予測しながら備える。

セミがうるさい

そろそろ紺野が戻つて来る頃だらうか…

あいつは見切り発車ではあるけど、自分勝手な奴じやない。

試合に出る出ない関係なく、チーム全員でアップをするという行動は全員の意識を試

合に集中させ、士気を向上させるという狙いもある。

それがわからぬあいつじゃない。

後ろからコンクリートを歩いてくる音が微かに聴こえる。

セミが大人しくなつた

違う

セミの声より、歩く音が気になるんだ

すると突然、左の頬を冷たい刺激が襲つてきた。

「はい、これ。差し入れ？つてやつ」

やる気のなさそうな声

やる気がないというより無駄な力の入っていない声

良く言うなら氣取らない、自然体

それだから周りの熱で中も外も蒸された体の空気は、一筋の碧い風に吹き流されていく。

「あ、S p l a s h …せつかくPRとかしたんだからさ、こつち飲んでよ、S M O O T H  
W A T E R」

「どつちだつて中身は変わんないだろ」

「じゃあ混ぜてみようよ。美味しくなるかも」

「だから変わんないだろつて…効果落ちるかもしれないからやるなよ」

セミが――――――――――――――――――

いや、もう目を逸らすのはやめよう

集中出来てないのはセミのせいじゃない

俺を惑わせる、夏そのものに反するみたいな清涼を具現化したかのような存在  
家からは近くても俺からは遠い高校の制服を着崩す、かつてバスケ少女だった、今は  
アイドル

「じゃ、今度一緒に試そうよ、透くん。あー、でも濁つちやうかな」

浅倉、透

やつと会えた、なのにびっくりするほど変わつていなかつた私たちの間隔、キヨリ  
近づけば平行線、なのに離れたら交差線

私が選んだ道の先には、選ばなかつた道を行くキミがいた

「透一人でやれよ、意外と透き通つて綺麗かもしれないし」

久我、透

「うーん…どうなるかわかんないし、やろう」  
「それは試合中に飲むやつだからやめろ！」

久我透と浅倉透

透明と透明が混ざりあう

透明と透明が混ざつたら

もつと透き通るのか、それとも濁つてしまうのか…

おもしろそう、だよね

## 一章 2話

2話

そもそもその出会いは幼稚園の頃。

我が家が遠くないのもあって親同士で仲良く、その延長で俺と透も一緒に遊ぶようになつた。何せ名前が同じ「透」なのだ。妙な繋がりというか、きっかけとしては十分だつた。そのまま共に幼稚園を卒園、足並み揃えて小学校の入学式にも家族同士で向かつた。

俺がバスケットボールにハマつたのは小学二年生の頃だつた。

いつも通り一緒に下校した後、透の家で遊ぼうとなつて透が物置からバスケットボールを見つけてきた。そこで初めて浅倉のおばさんに「バスケットボール」というスポーツについて聞き、聞き様聞き真似で透と一緒にボールでドリブルをした。

そのオレンジの球は小学生用の5号球ではなかつたので、当然あつちへ跳ねこつちへ飛び、とてもドリブルとは言えないものだつた記憶が残つてゐる。それでも当時の俺はこのボールに心を奪われ、リズミカルに手に跳ね返る感触に憑りつかれた。

一方の透はショートを打つ方に興味を持つたらしく、近くにゴールがある公園を探しては、親たちが夕ご飯のために迎えに来るまで、俺となんちやつてlon1に打ち込んでいた。

そんな俺たちがミニバスケットボールの地域チームに入るのは当然の流れで、中学で男バス女バスに分かれても、公園で一緒に練習出来ると思っていたのは、

—— 私だけだった

透くんはバスケの強豪高校にエスカレーターで行ける私立中学へ進学した。

私よりもバスケに魅力を感じたキミは、私たちの家に近い中学じや満足にバスケ出来ないって思ったのかな。

幼稚園で小糸ちゃんと仲良くなつて、もともと樋口は家が隣だし、小学校で雛菜とも友達になつて：私が暇なときは透くんも入れて五人で過ごすことが多かつたね。

小学生の頃の小糸ちゃんは透くんの事、やけに気に入つてたつけ：

雛菜が外で遊ぶのが嫌だつて言うから、樋口が一緒に日陰で過ごしてて、私は小糸

ちゃんと透くんと走り回つてた：そうだ、みんなで遊ぶ時は雛菜のために日陰のある公園に集合してたんだ、ゴールないとこ。ゴールのある公園は日影なかつたから。

あー、ゴールがある公園に透くんと樋口連れてつたこともあつたつけ。

一回だけ透くんと日陰のある公園に行つたこと也有つたけど、私たち2人でゴールの無い公園で遊んでもつまんなかったんだよね。つまんなすぎて近くのバス停にいた人を誘つて、ジャングルジムでずっとダラダラしてたんだ、うん、覚えてる。

だつてその人が今の私のプロデューサーなんだから、これつてある意味運命、だよね。

中学でも私はバスケ部に入つた。

普通にバスケ好きだつたし、せつかく透くんと地域のミニバスで上手くなつたから、やんなきやもつたいなかなつて。

雛菜も私と一緒がいいって言つてたけど、汗かくし疲れるよつて言つたら隣で練習見  
れて疲れないからつて理由でバレーボール部に入つた。練習中にこつちばつか見ててよく怒  
られてたけど、雛菜のお母さんは雛菜が運動してくれてのを知つて嬉しそうだつた。

樋口は部活入つてなかつたけど、いつも私と雛菜が練習終わるの外で待つてくれた  
んだ。マネージャーでもいいじやんつてバスケ部に誘つたけど「あんまり好きじやな  
い」つて。

よくわかんないけど、なんか納得できた。

――ごめん、ちょっと嘘ついた

思つたんだ、バスケやつてればまた会えるかなつて。  
家は近いけど透くんの学校つて電車通学だし、私の中学も駅の反対だからさ、会わなかつたんだ。試合会場とか、ほら、おつきな体育館だつたら男子と女子まとめてやつたりするじやん？

ぜーんぜん。

マンガのバツタリつて普通にありそつて思つてたけど、そうでもないんだね。  
お母さんたちは一緒にご飯食べに行つたりしてて、たまにどう？つて誘われたりもしたけど、なんか、そうじやないんだよね、うん、それはなんか違う氣する。

私たちが出会うなら道端でバツタリとか、会場でプレーしてるのをバツタリとか、それでまた、どこまでも見通せる透き通つた毎日が始まるかもつて思つてたのは、

俺だけだつた

俺にとつて透との再会は、正直苦い思い出だ。数か月前の冬に、都内の有名な体育館で関東の強豪高校が集まる交流試合が開催された。

去年は東京ベスト4の成績を残したうちも呼ばれていたし、全国大会やプロの大会も開かれるような会場だ。監督も「全国に行く予定のお前たちのいい経験になる」と言つて参加の返事をしていたそう。けど、その目は俺たちと同じように、年甲斐という言い訳で隠し切れない輝きを放つていた。自分が為せなかつたあの場所での試合に、指導者として想いを果たせるから…かもしれない、本当のところは分からぬけど。やっぱり観客席から見ているのとコートに立つとので、胸に沸き立つ血の色が違うのはきっと監督も同じなんだ。

大会ではないがそれなりの大舞台での練習試合に、俺はまだ当時1年生にも関わらずAチーム、一軍の1番…つまりガードポジションを任せられた。ボールを運び、味方に指示を出し、試合を動かす…ゲームメイクを担う重要なポジションだ。そもそもバスケは選手が5人しかいないから、重要じやないポジションなんて無いけれど。結果を残した3年生が引退して世代交代した時期だったのもあって、チームの編成を

一新するためには1年でも試合にガンガン出していく…ミーティングで監督がそう言つてはいたが、まさかいきなり自分が、あの滑り止めの効きが良い、多くのトッププレイヤーたちが跨いできた白線の内側でゲームを指揮することになるとは思わなかつた。

それでも日本でバスケに魅了された者として、あの場所に憧れないわけがない。

いつもより少し緊張が増した程度で、俺のコンディショントとしては万全だつた。

前半、同じ関東の強豪チーム相手にも互角以上の展開で進み、俺のゲームメイクがハマつて流れを取り返した場面もあつた。日頃の努力というのは自分を劇的に変える物じやなくて、こういう突然降ってきたチャンスを自分のものにするためにあるんだと信じてきたのが報われた気がした。

前半の立ち回りでいくらかの自信と心の余裕を持てた俺は、後半も1年としてもつと勝利に貢献しようと意気込んでいた。同じ学年の仲間たちにもいすれチャンスは回つてくる…まだ1年でも試合で活躍できるんだという姿勢を見せよう…と。今思えば、なんて傲慢な考え方だつたんだろう。

勝手に自分が先に一步踏み出した気になつていた。

後半3分過ぎにシュートを決められ、今田さんからスローインをもらう。

ゾーンディフェンスを組むために素早く戻る相手選手たちを見つつ、ゆっくりとフロントコートへ向かいながらドリブルを衝く。

目に映る俺以外の9人のプレイヤーを見渡していたその時、他のチームが休憩していた観客席のさらに上、観覧席の入り口のところに立っている人物が目に入った。

いつもならそんなところに目をやることなんてない。

俺が見るべきものは9人のプレイヤーの動きと試合時間と24秒のショットクロック。

それ以外のものに注目するのは集中できていない証拠だ。

けど、最高の環境、高いコンディション、うちが掴み続けていい試合の流れ：これだけ揃つていて俺が集中出来ていなかつたなんて考えられない。

バスケさえしていれば幸せな俺に限つてそんなことがあるわけがなかつたんだ。

今だからこそ分かる。

俺は自分で見たんじやなくて、視線を惹き寄せられたんだ

圧倒的な存在感に、そのオーラに

それでいて、勝手に惹き寄せておきながら透明で

覗いても覗いても色が無くて

もつと奥まで覗き込もうとして

俺の手からバスケットボールが離れていた。

相手のゾーンの1番にカットされたんだと気が付いた瞬間、何も言わずに中村先輩と  
今田さんが相手の速攻阻止のために俺の横を駆け抜けて行つた。

俺も戻ろうとした時には既に、中村先輩が自分のフェールを使ってタイマーを止めて  
いた。

思い出して急いで振り返った俺に浅倉透は何もせず  
その半透明な瞳でじっと俺を見つめていた。

# 一章 3話

3話

今日の試合は、結果から言えば予想通りの展開になつた。

うちのチームがリードを保ち、相手が少し点差を詰めてきたら紺野にスリーを撃たせ突き放す。

後半は3年生が2年生と交代し、俺は1年生のガードにゲームメイクを任せて外からのシユートに徹した。

そのまま試合は終わり、特に苦戦した場面も無く勝利。

引退が決まり、嗚咽を堪える相手チームの選手の横を黙つて通り過ぎた。

諸々の支度を終えた俺は、寄り道もせずに紺野と電車に乗つていた。  
陽が伸びる夏はこの時間でも夕日は出ていない。

「そいや透、お前浅倉さんどうしたんだよ？」

「どうしたって？」

「いや、一緒に帰んなくていいのかって」

「まあ…別に帰る約束とかしてないし」

「あー、そう…」

紺野らしからぬ歯切れの悪さに引っ掛けたりを覚える。

「ん、なんかあるのか？」

「いや、無いって訳じやないんだけどさあ…まさか聞かれてねーのか…う？」

夏の湿気を吹き飛ばす車内空調が、紺野の短い前髪を揺らす。

「一応さ？俺はお前と浅倉さんの関係を直接聞いてるから、俺が首突つ込むような話  
じやないってのは理解してんだよ、ガキみたいに冷やかしていいもんでもないって」

「ああ、まあ…その方がありがたい」

「その上で話すけど、俺、今日の試合前にスポドリ買いに行つたじやん？あん時に浅倉さ

んと会つたんだわ』

「そうか、確かに透が来てすぐ紺野も戻つて来てた。

アップ前に紺野が自販機を探しに行つたけど、透と会つてたのか。

あの謎オーラは耐性無いとついていけないと思うが……」

「上手く話せなかつたんじやないか?」

「あー…流石幼なじみ、口パツサパサでマヌケ面してたわ」

『浅倉透というのはそういう人間だ。

生まれ持つた空気感と動じない態度、淀みのない所作は人の視線を無意識に惹き寄せる……

その実は普段から何も考えていないし、動じないのは相手の話をよく聞いてないだけ。話をそれっぽく締めて後回し、後に回した事を思い出すのはいつも手遅れになつてから。

とにかく、知れば知るほど透明度が下がつていくものだ。

「で、そん時さ、お前と同じチームかつて聞かれて…その後、」

『えっと、久我透、つて人さ、試合出るかつてわかる?』

「…つて」

「間違いなく透だ、聞いた相手が紺野で良かつた」

「それどういう意味だ」

「良くも悪くも」

「あつそ…ほんと、出るつて言つたらよ、」

『あ、そななんだ。じゃあ、試合終わるのつて何時?』

なんだ、透は何を聞いているんだ…?

それより、紺野も何を言いたいんだ?

2人とも普段は単純なくせに、こういう時には歯切れ悪いな。

「細かいことはいいから、お前が言いたいことを言つてくれ。別にお前にキレたりしな

いし…」

「はー…伝わんねえ野郎だな…だから浅倉さんは、こんなクソ暑い中お前の応援に来て、お前にお疲れって言つて一緒に帰りたかったんだろつて…言われなかつたのか?」

「…透が、一緒に…つて?」

「いや一緒にとは言つてねーけどさ!お前が出るか聞いて、終わりの時間も聞いてきたつてことはつまりそういうことだろつて!」

それはどうだろう…

そもそもあの透のことだ、思いつきさえすればその止まらなさなんて紺野の比じやない。

そんな、俺と一緒に帰るなんてことを透が考えるか…?

「無いだろ。お疲れって内容のチエインなら試合後に来てたし」

「…ちなみにお前、なんて返したんだ?」

「え、あれしか出てないし別に疲れなかつたつて」

「つ…はあつ…お前つてやつは…!ほんとによお…!!」

「何がダメだつたんだ…?」

「…全部だよバカ」

あの紺野がここまで落胆するなんて…俺が相当やらかしたっぽいけど、ぶつちやけようわからない。普段から透とはこんな感じだつたし、今日が誕生日だとか、そういうものもない。普段といつても再会した半年前からだけど。

「…勘違いしないでほしいんだけどよ、別に俺はお前と浅倉さんが付き合えば～とか、そういう事は言つてねーんだ、それこそお節介つてやつだし」

「アイドルが恋愛すんのつて良くないんだろ？」

「まあそれは事務所とか、そういうとこ次第なんだろうけど…そうじやなくてさ…」

「透、お前なんか浅倉さんとの間に妙な線引きしてねーか？」

線引き

一線を引いている

その自覚はある

俺は透と再会してから、踏み込まないように、そして踏み込まれないようにしている。それはお互いにもう子どもではなくって、昔のように接するのが小つ恥ずかしいのもある。

だが本当は、怖いのだ。

あの日の透の、どこまでも深くどこまでも透明だった瞳の奥を、今でも覗き込みたいと思つてゐる

透明の先を望んで、望んで、どこまでも深みに落ちていった先の景色に恋焦がれてい  
る

経験した人ならわかるかも知れない

自分を魅了する芸術と出会った時、理想の相手を見つけた時、この世で唯一の救済を得た時：

人が何かに狂つた時に、自分が自分でなくなつていつてしまふと自覚した時の恐怖

が。

このまま進めば、悩み苦しみながらも進んでいく人間ではなく、ただ望む物を求めるだけの獣のような存在へと堕ちてしまう…そう思うと正常な危機察知の感覚を持つていれば手や心が震えて止まらない。

あの透の…透明だつた透の、あの日の濁つた半透明の小さな泉の先には何があるのだろう?

それを知りたくてたまらない

透が透明でいられなくなつた、なにがそうさせた?

聞けるなら今すぐにでも聞きたい、問い合わせたいほどに…

そんな俺を人の道の崖際で引きとめてくれたのがバスケだ。

透の目に惹かれたあの時、俺の手からボールが離れた…バスケが俺の手から離れた瞬間に俺の意識は透から引き剥がされ、手放さずに済んだ。

幸せを失うのが怖かったんだ、俺にとつての幸せはバスケしか…

もしも狂うなら、俺は透より：バスケの方が「おい、透？」

「あ…なんだ？」

「だからさ、恋愛的な意味じやなくて、浅倉さんと一回ちゃんと向き合う事を考えてもいいんじやねーのつて。お前が平気ならさ」

思考の嵐から抜け出す。

そうだ、今は紺野と話していたんだ。  
勝手に一人で没頭していた。

「一緒に帰りたいってことは、向こうも何かあるからそう言つてんじやね？たぶんだけ  
ど：幼なじみなら一緒に帰るとか、別に不思議でもねーだろ？」

「…昔は毎日一緒にだったから、まあ」

「今度どつかで正面から会つてみろつて。良くも悪くも何か変わるかもしないぜ？」  
「悪くはダメだろ」

「このまままよりはマシだと思うけどな」

「……」

「こいつのこういうところは本当に羨ましい。  
グダグダするくらいならまず行動、か…」

「…考え方」

「ここまで言つといてなんだけど、口出して悪かつたな」

「いや、こういう時は助かる」

「助かつてねーのはいつだよ」

「いつもだよ」

「こうやつて支えてくれる存在が自分にいることも俺の幸せなんだ、それを忘れるところだつた。」

「まだ少し怖いけど、あの瞳と向き合つてみよう、落つこちない程度に。  
そこに広がる景色は、どんな色をしているんだろう？」

大丈夫——きっとおもしろいよ

# 一章 4話

4話

個人的に苦手だったステップを克服するために、午後からレッスン室に籠っていた。これで次のM V撮影に向けて残つてた不安要素は全部解消したし、新曲の話が出てもすぐにつちの練習に専念できる。

「私が置いて行かれるなんて、それ、なんて笑い話？」

この夏で私たちは大きく変わった。

個人としても、ユニットとしても、良くも、悪くも。

同年代のファンが増えても、作る側の人間が使わないと言えば使われない。

そういう仕事だつてことを、この夏は見せつけられた。

だけど、そのおかげでどこに向かえばいいのか、少しだけわかつたような気がする。

個人としても、ユニットとしても、良くも…悪くも…

そこの折り合いはどうせあの人人が何とかするから、私がそれでバランスを取ればいい。そもそも透を、私たちを焼きつけたのも元はあの人なんだから…それくらい付き合つて当然でしょ？

消臭と着替えを済ませてレッスン室に鍵をかける。

鍵を返却するためにそのまま事務所に向かい、中に入る。

「お疲れ様です」

「でね：あー！円香先輩おつかれさまーー！」

「お！円香お疲れ！鍵返しに来たのか？」

「ええ、まあ」

「あはーー、円香先輩自主練？」

作業中のプロデューサーと、ソファ上でスマホを触りながら話しかけていた雑菜が声を掛けてくる。どうもこの人はいつ見ても何か仕事をしている気がする、一体いつ休んでるのか…：

こういうところがほんとにオールドタイプ。

『あの花』のステップ、確認してただけ

「へえ、円香先輩えらい！」

「…雛菜はもう平気なの？」

「ん？ 大丈夫？」

「…あつそ、ならないけど」

雛菜はいつも変わらない。

いつだって自分のしあわせの事しか考えてない。

皆で練習しようって時も気が向かなければ先に帰つてなぜか透の部屋にいるし、仕事中でも自分の興味がある事にしか本当の笑顔は見せない。

いつも変わらないという点においては透と似たタイプかもしれない。

ノクチルで初めてのテレビ番組の仕事、新人アイドルを発掘する番組で私たちは好き勝手やつた。

次の仕事は花火大会、誰も見てない中でのミニライブ。

どつちも結果としては惨敗、けど私たちとしては得るもののはあつたと思う。

前に小糸と、流れで雛菜のアイドル活動に対する話になつたことがあつた。

『雛菜ちゃんは雛菜ちゃんのことしかわからないって…ま、円香ちゃんは意味、わかる…？』

『たぶんだけど、ネットの書き込みのことじやない？』

『…あ、あの、頑張つてないとか、覚悟が足りないと書かれてたこと…？』

『そう、他人の努力してるところなんて見ても無いのにわかるのかつてこと』

雛菜は自分しか知らない。

良く言えば自分の事はよく理解しているし、逆に自分のことしか理解していない。  
だから「人に見せる為の努力」はやりたがらない。

それは雛菜にとつてしまわせくじやないから、必要ないから。

でもその姿勢は今のアイドル業界においては逆風的。

世間一般、大衆、業界が求めているのは「頑張つている」アイドルや「自分たちを幸せしてくれる」アイドル、その中身が天然か作り物かなんて関係ない。アイドル自身が幸せかどうかなんて誰も考えやしない。

でもそれは当たり前。誰が知らない人間の幸せなんて願うだろう？

そんなのは聖人がすること：私たち普通の人間の役目じやない。

だから雑菜の姿勢は世間には受け入れがたいし、業界も売れない商品に金なんて出さない。

そうわかっているから、私はそれなりにこなす。

それなりにこなして、それなりに笑つていれば、それなりに人気になる。

それが、今求められているアイドルの姿のはず。

なのに、自分のやりたくないことはやらないアイドルがいる

なのに、いつだつていつもの自分を見せられるアイドルがいる

なのに、誰よりも努力して「それなり」を越えようとするアイドルがいる

なのに、勝手に私たちに色を与えて、

勝手に私たちに踏み込んできて、

勝手に私たちを濁らせて、

勝手に私たちを変えて、

勝手に私たちを信頼してきて、

勝手に私に期待して、

勝手に私に風を与えて、

勝手に私を燃やして、

勝手に私に水を注いで、

勝手に私を二酸化炭素まみれにして、

勝手に私を錆びつかせて、

勝手に私に夢を抱かせて、

勝手に私に、誰かの期待を背負つて空を舞える翼を与えて…

何もかも怖かつた

W. I. N. G. で勝てたつて怖いものは怖い

私の背中に勝手に涙を積まないで

こんな大きな翼なんて、私には要らなかつた

ただ何もなく、透明でいれば良かつたのに  
こんな気持ちを知らずに済むとわかつっていたのに

「お疲れさまでした」

「お疲れ様、またな円香！」

「円香先輩またね～～！」

これから打ち合わせだつたらしい二人を残して先に帰宅の途につく。どう見ても打ち合わせ前の様子ではなかつたけど私以外とはあんな感じなのかもしれない。  
まあ二人がどう打ち合わせしようと私には関係ないけど。

少し夕陽がかつた空の下を、両耳に『アルストロメリア』を流しながら歩く。

「アルストロメリア…幸福論…私たちに、私にとつての幸福論…」

何が幸せで、何が不幸か：

雛菜の言葉を借りれば、そんなものは自分にしかわからない。  
なら私にとつての幸せはあの人人が与えてくれるものじやない、私が決めるもの。

みんなで透明な幼なじみでいるのが幸せ

みんなで海に行くのが幸せ

私の鎧が剥がれないのが幸せ

そもそも鎧びつかないのが幸せ

もうわからない

私は変わつてしまつたから、もう透明ではいられないから…

「はあ…ほんと、面倒…」

柄にもなく答えを求め続けることに疲れてため息を漏らした時、視界の端に映る見慣れた公園の真新しいブランコに、誰かが座っているのが見えた。

「あれ…浅倉…？」

微かな夕焼けすら自分のものとしているような、纏う雰囲気が少し憐れな幼なじみ。

「あ、樋口、やつほー。」

今日は一日オフだったはずの浅倉透がそこに座っていた。

# 一章 5話

5話ニユアンステーマ See—Saw 「あんなに一緒にいたのに ↗ Re Tra  
c k s」

## 5話

——なんか思つてたのと違つた でも普通はこういう感じだよね

まだ夕日を見せない時間帯の電車はいつもなら学生でいっぱいなのかもしれない、高校も事務所も歩いていけるから電車乗らなくてわかんないけど。

今はまだ夏休みで席もガラガラだつたから、贅沢に真ん中に座っちゃつた。

——期待してたんだって なんか意外だつた

今日は何か聴きながら帰りたい気分かな。アイドルになつてからはプロデューサーがおすすめしてくれるやつばつか聴いてるかも。

最近だとあれ…あさひが聴いてほしいつすくつて言つてたからその場で買つたやつ、なんだつけ…しゃにむになんとかくつて、ジャケの愛依がカツコいい曲。

——似合わないよね それはちょっとわかつてた

最寄りに着いて、改札でペスモの残高を見てから家の方に歩く。

普段乗らないからあんまり入つてないかと思つたけど、結構入つてんじやん。これならもつとどつか寄り道してもよかつたかも。

どうせだし今から少し寄り道しよ。

どこがいいかな、遠回りしちゃおうかな。

——なんかの曲の歌詞の気持ちわかつたかも けつこう刺さるね

あ、公園…いつもみんなで遊んでた方の。

あの頃もこんな感じだつたつけ？

ここ、新しいプランコできたんだ。

滑り台とジヤングルジムとなんか動物のバネみたいなのは覚えてるけど。

もつともつと話してた気がする

うん、プランコにしよう。

私に風が吹いたから？

小糸ちゃん来るかも、この間樋口が言つてたし。

キミに風が吹いたから？

私は風が無くてもいいよ

——私は私のままで楽しいよ

そつか 私の風が止まつても

キミに吹き続けるなら

もう

そういうこ 「浅倉……？」

「あ、樋口。やつほー」

なんだろ…なんか言いにくかった、今の。  
樋口が近づいてくる。

「空いてるよ、となり」

「…」

少し躊躇つた後に隣のブランコに座ってきた。

「この公園つてブランコなかつたよね」

「これ出来てそんなに経つてないでしょ、まだ綺麗だし」

「そつか」

「今日、観に行つたんでしょう？」

「あ、言つてたつけ？」

「…事務所で話してきたのは浅倉の方」

「ふふつ、忘れてた」

「そういえば話してたかも。」

樋口に大会の組み合わせ表、見せた覚えが無くもない。

「なんで一人なの？」

「終わるの遅いかもつて言われたから、先帰つてきちゃつた」「なんで待たなかつたの？」

「今日『コードグレー』やるじやん、録画してなかつたんだ」「ふーん…ドラマの方とつたんだ」

「…なに、樋口怒つてる？」

「別に」

「いつもはスマホ見てるじやん」

「たまたまでしょ」

「そつか」

何か怒らせちゃつたっぽい、心当たり無いけど。

「樋口は今日何してたの？」

「自主練」

「へー、えらいじやん」

「どうも」

あ、これ絶対私だ。

どうしよう…どうしようもないけど。

「…はあ」

足でブランコに速度をつけようとした時、樋口のため息が聞こえた。

「…最近は、意地張つても無駄つてわかつてきたから」「…ん？」

「浅倉、なんで久我から逃げたの？」

逃げた

透くんから、逃げた

私はずっとここにいるよ

待つていれば会えた

キミが風に吹かれただけ

でも待てなかつた

いつも通りだよ

なんで?

変わったんだからさ　お互いに

だつて、わかんないじやん

もう子どもじやないんだし

触れようとして離れられたら

だつてそれが私たちじやん

近づけば平行線で　離れたら交差線

あのキレイな、透明な毎日が

付かず離れずな関係

キミのキレイな目が、私を見て

互いに都合のいいキヨリを保ち続ける

濁つたりしたら

それがキミと私だよ

もう私は

戻れないよ

「帰るよ、浅倉」

「あ⋮」

「はあ⋮私シャワー浴びたいし。タゞ飯、食べてくでしょ?」

「あ、うん、たぶん」

「メールしとくから」

「ありがと、樋口」

「⋮どういたしまして」

# 一章 6話

6話

後ろじやない、隣でいつも見てるからわかる

——代々木で撮影のお仕事の時に試合てるの、見かけたんだ。

半年前、普段聞かないような上ずつた声で話してきた。透き通った目をして

——連絡先げつと。みんなにも渡していいって言つてたよ、いる？

その後どうやつたのかチエイン交換してた。昔の透を思い出すような顔で

——ねえ、樋口も行こうよ。練習試合観に行く人、意外といるんだよね。  
会いに行くだけなら一人で行つて。試合なら一緒に行つてもいいけど

——久しぶりに今度一緒に帰ろ、あ、樋口も会う?  
会うのは構わないけどその日はバス、自主練するから

——あ、樋口。やつほー。

ひどい顔

普段は顔には出ない”ノクチルの浅倉透”とは思えない  
ただ、なんとなくだけど久我が透に何かした感じじやない

だつて顔に書いてある、怖いって

前の私と同じ、顔に書いてある

「狭くない？」

「平氣でしょ」

「樋口わりとコンパクトだもんね」

「……」

そこからどうして私たちは、一緒に狭いお風呂に浸かつてるんだろ：

透を連れて帰つてきた私に、お母さんが「ご飯はちょっと遅くなるから先に汗を流してきたら?」って勧めてきた。その時に「久しぶりに透ちゃんも一緒に入つていつたら?」とも言われてなきや、こんなことにはなつてなかつた。

でも今の透をほつとくと、どこに飛んでくか分からないし、ちようどいい。

ただでさえどこ見てるかわからない時ばっかりなんだから…

「……」

「……」

「ふふつ、いつぶりかな、樋口とお風呂入るの」

「さあ?覚えてない」

打算と流れで入つたけど、気まずい…

さつきまであんな顔してたのに、もう何もなかつたみたいに普通の顔。

でもわかってる、透はただただ下手くそなだけ。

顔に出すのがそもそも下手だし、ついでに愛想笑いでごまかして表情に出そとしな

いからたちが悪い。でも本当に強い感情だけはわかりやすく出てくる…  
さつきのを見ちやうと話題に出すのが透に申し訳ないけど、このままにして仕事に影響したりなんかすれば最悪。

ただでさえノクチルはこれからなんだから。

「今日さ、試合観たんだ」

意を決して切り出そうとしたら、透の方から話に出てきた。

「つ…うん、知ってる」

「勝つてた。今日はもう試合ないってトーナメント表で知つてたし、すぐ解散?つて送つてさ」

「うん」

「次の相手の試合見ていくことになりそうな流れつて来て」

「うん」

「じゃあお疲れつて返して」

「…なんでそれ最初に送んなかったの」

「ん……ふふつ、わかんないや」  
「はあ…で？」

天井から滴り落ちる雫が透の髪に落ちる。

「後半からしか出てないし、ガードでもなかつたからそんな疲れなかつたって  
「……」

前言撤回

素だとしても、あつちもあつちじやん…

「あ、ガードっていうのはボールを運ぶ役割で」

「知ってる。浅倉もそれだつたでしょ」

「そつか、知られてた」

「そこはどうでもいい、一緒に帰ろうとしなかつたのはなんで？」

「えつと、なんていうかさ…」

透の目が少し濁つた気がする。

「なんか、私と透くんってこんな感じだつたつけて思つて」

「そりやお互いもう高校生なんだし、多少は変わつてゐでしょ」

「やっぱそういうものなのかな」

「面倒だから、一言で言つて」

「えー」

「どんだけ引き延ばしてると思つてるの」

「透くんに一緒に帰ろつて言えなかつた」

「…………はあ…………言えるじやん」

「ふふつ、樋口のおかげかも」

やつと言わせられた、透から誘えなかつたつて  
きつと自分でも心のどこかではわかっていたはず

透はそれを自覚するのも、自覚するために口に出そうとするのも苦手だから、こう  
やつて無理やりにでも出させてやるしかない、そう言えなかつた理由も：

「言えなかつたのはなんで?」

「うーん……ちょっと、怖かつた…?」

「…ま、珍しく顔に出てたからそうなんでしょ」

久我がどうのじやなくて、これは透自身の問題。

「……そつか。私、怖かつたんだ」

「なにすつきりしてんの」

「なんでもない」

でも透は自覚した。

自覚できたのなら、あとは自分で答えを出せるはず。

透は普段から何も考えてない。

でもそれはバカだとか、考える力がないとか、そんなことじやない。

むしろ透は興味があることには意外と頑固だし、空想好きでロマンチックなどこがある、ちゃんと考える時は深く考え込むタイプ。

だからもう放つておいても大丈夫。

「仕事の時はちゃんとしてよ」

「任せて、いつも通りでいくから」

「それはそれで困るんだけど」

「ふふつ、大丈夫。ちゃんとやれるから」

目の前の私の幼なじみはもう、"ノクチルの浅倉透" だった。

## 一章 7話

7話

その日は朝から快晴だつた。

天気予報も日本の夏にしては珍しく湿気が控えめになると予想を出していて、快適な一日になるそう。こんな日には広い野外コートでイアホンから曲でも流して、ドリブルを衝くのが気分転換にいいと決まつてゐるが、今日はチームの決まりでもある「オフデー」だ。

身体的、精神的ともに人間には休むという行動が必須であり、体に休暇を与えないといふのは逆に効率を下げ続けるという研究結果が今は普及してゐる。もう努力量のみで勝敗が決まるなどという根性論は廃れた時代だ。

うちの監督は厳しく、そして鬼畜である。

だが強豪チームを率いるだけの手腕があるのは確かな事実だ。

『休暇を正しく取るというのもれつきとした練習メニューの1つ』と言つて、このチームを率い始めた頃から選手に徹底させてゐるらしいこのオフデー…何をするのかといふと、「バスケを始めとする運動を禁止する」のだ。

買い物や軽い観光といった日常生活を除いて体に休暇を与える。

それによつて筋肉には回復を促し、精神はリフレッシュさせ、選手がバスケに凝り固まることを防ぐことが目的なんだとか。

実際、俺みたいにバスケばかり目に映るタイプには大いに効果があつた。こういつた勝利のために一歩引いた判断も下せる：俺は監督のそういうところに尊敬を抱き、指示に従つてゐる。

つまり俺は今日、ゆつくり過ごす時間を得た。

得たのだが…：

「えっと、君が透の幼なじみの久我透くん：で、あつてるかな？」

透に指定された河川敷で、

「俺は283プロダクションの、ノクチルのプロデューサーだ。あ、これ名刺」

知らされていない相手と出会っていた。

「ノクチルと幼なじみでした、久我透です。高校2年生です」

「君のことは聞いてるよ、主に透から…あ、透つて呼ぶとわかりにくいかい？」

「え、慣れているので大丈夫です、そのまで」

「いや、浅倉もうちのアイドルだ、外での呼び方にするよ」

とりあえず舗装された道から外れ、川岸まで降りて挨拶を済ませる。

この人は透たちの所属事務所、283プロのプロデューサーと名乗った。

特に嘘をついている様子もないし、名刺も本物なんだろう。

黒髪をワックスでかき上げた姿と白いワイシャツが誠実さを表しているようだ。

「今日、浅倉にここに来いって呼ばれたんだが…もしかして君もか？」

「こんなことするのは透しかいませんよ」

「はあ、やつぱりか……まいったなあこれは…」

「あの…透はアイドル、やれてますか…？円香がいても、透は結構自由なので…」

「もうすっかり一人のアイドルだよ。ノクチルはみんな頑張ってくれてるし、浅倉はセンターハンドとしてしつかり3人を引っ張ってくれてる」

「…それほんとに引っ張ってます…？引きずり回してません…？」

「…幼なじみつてのは本当なんだな…まあ、たまにそういう時も…たまにな？」

「…まあ、上手くいってるなら…」

透から聞く限りでは、みんな小学校の頃から特に変わつてないそうな。今も俺には、透が先に行き、雛菜が続き、小糸が止め、円香が諦めるのが見える。

しかし結果としてユニットが有名になつてているのだから、それは奇跡的に状況が噛み合つたか、このプロデューサーの手腕かのどちらかなんだろう。たぶん後者だろうけど。

「いや、ほんとに迷惑とかは無いんだ。むしろスカウトしたのは俺の方で…そうだ！浅倉の幼なじみの久我くんに相談してみたいことがあるんだけど、どうかな…？」

「俺にですか？そんな、アイドルの話とか全然知りませんけど…」

「ああ、アイドルの話というより浅倉本人の話なんだ。今は君以上に適任が見つからなくて…」

「ちなみに円香たちには…」

「一応聞いてみたんだが、雛菜はちょっと抽象的過ぎてな…小糸には分からなって言われたよ」

「小糸は俺と同じで別の私立に行きましたからね、透に関して知らない事もあると思いません」

「円香には…実は聞いてないんだ。プロデューサーなら自分で聞けって言われそうでな…」

「…円香が？なんだかんだ付き合ってくれるやつだと思いませんけど…」

「俺じやまだまだ心を開いてもらえてないんだろうな、今は仕方ないさ」

円香は別に冷たいわけじゃない、それは俺が幼なじみだからとか関係無く。

あいつは自分が頑張るべき時と場所を間違えないようにしているだけだ。それは昔からそうだった。だからって自分勝手つてわけでもなく、本当に困っている相手は見捨てず、最後まで手を貸してくれる優しくて面倒見がいいやつだ。多少言葉に棘があるけどそれは気恥ずかしさを隠すため。

冷たい言葉に熱い心、それが俺の知る樋口円香。

何か機嫌を損ねることをしなければ普通の女子だ、それは誰だつてそうだけど。

「…わかりました、俺でよければ」

「そうか！助かるよ！」

その反応から、かなり悩んでいたみたいだ。

さつき聞いた話だと、283プロは業界大手ではあるが、なんと所属アイドルをプロデュースしているのはこの人だけらしい。ノクチルを知つてから少しは知識がついたが、それ以前の俺でさえ283プロのアイドルユニットを3つくらいは知つていた。

という事はこの人は一体何人のアイドルを同時に担当しているんだろうか…？

283プロに入社してからずっとプロデューサーは自分1人だと聞いて驚くと同時に、この人なら4人もしっかりとやつていけるだろうと思った。  
そしてもう1つ、円香の苦手なタイプだろうな…とも。

「相談は浅倉：透が、最近気になる人が出来たと話してきたんだ」

止まつていた灰の時間は、彩を与えられ、再び熱を帯びる。

「それが恋愛的な意味なら、Pとして少し介入しないといけなくなるかも知れないんだが：」

「幼なじみの君は何か知らないか？」

## 二章 8話

2章

ニュアンステーマ YOASOBI 「夜に駆ける」

8話

苦手な物理の教科書を閉じて大きく背伸びをする。

普段から酷使している体が筋肉痛で軋み、グツと声が漏れる。

伸ばしきった体を戻すと、自然と詰まっていた息も出て思考がクリアに戻った。

「もうそろそろ11時か？」

前期の期末は特に評価が悪い科目は無かつたが、物理だけはあまり出来がいいとは言えなかつた。普段の小テストのおかげで評価自体はそれなりだつたが、期末試験が苦しかつたので後期に入る前に基礎をもつと固めておこうと思つたのがこの夜勉強の始まりだ。

うちの部は学校の成績 자체はそこまで重視していない。赤点を取つたとしても監督から怒られたりするわけではないが優先順位は補習のため、練習に参加できないという大きなデメリットがある。

そのため割とみんなしつかり勉強して試験に望んでいる。

レギュラー陣の中では楽観的なP.F.の南先輩と、意外にもキャプテンの中村先輩が学年平均点のラインを前後している。二人ともよく練習後に自主練で残っているので、帰つてそのまま疲れて寝てしまう事が多いそうだ。試験前には今田さんを筆頭に成績上位の先輩方で勉強を見てあげているとよく聞く。あのイケチヤラ大先輩（自称）の今田さんが学年10位内で、うちのチームでも1番成績がいいというのが未だに信じられない。

ちなみにうちの代はCの鷺崎が悩みの種。

センターのあいつが補習で抜けると連携プレーの合わせが出来なくなるという状況が生まれるため、試験前は紺野が付きつきりだ。

もう寝ようか。

明日は午前練でいつもより体を動かすから、オフデー終わりだし体調を整えておこう。

明日の練習の準備を終えてベッドに腰掛けた時、スマホが呼んできた。

「電話？ 誰だ…なんだ透か…え？」

透からの着信だつた。

こんな時間に透から電話つて何の話だろう？

不思議に思いながらもあまり待たせていると切れてしまうかもしぬないので、ひと呼  
吸おいてから通話ボタンをタップし、ベランダに出る。

夜風が涼しい。

『もしもし？』

『あ、出た。ごめん、夜遅いけど』

『いや、別に大丈夫』

『そつか、よかつた』

再会してからいつもしているような、口調は慣れているのにどこかぎこちない挨拶。  
逆にこれが俺たちの今の微妙な関係を示しているように思える…少なくとも俺の中

では。

『あのさ』

『ああ』

『今日、楽しかったね』

『服、助かつた。ずっとウエアと制服ばつか着てたから』

『ふふつ、まかせといて。ていうか、あれでよかつたんだ?』

『え?まあ:透が選んだ服なら変じやないだろ?』

『あー:うん、大丈夫。事務所にあつた献本のメンズのやつ、参考にしたから』

そう、今日は透と昼間ショッピングに行つたんだ。

貴重な休日だったのに何故か普段のオフデーの感じがしなくて忘れてたけど:普段一人で過ごすから感じていた何かを、透と過ごした今日は感じなかつた。

きつと楽しかつたんだ。

実際、前より少しだけ透との距離感の端っこを掴み直せた気がした――

「あ、ごめん透くん、待たせた」

「プロデューサーさんにさつき電話がきて、事務所に戻るつて」

「あー…そつか：後で謝ないと」

「今のうちにチエインでも一言入れといた方がいいぞ」

プロデューサーさんが戻つてすぐに透が河川敷に来たが、あいにくすれ違いになつてしまつた。

「えつと、なに話した？」

「…特には。軽く自己紹介したくらいで」

「…そつか、じやあまた今度かな」

「何が？」

「ふふ、なんでもない」

「それで今日は…」

「あのさ、デートしようよ。一緒にショッピングとか」

「透は何を見に行くんだ？」

「え、特にないけど」

「ノープランか…なら俺が行きたい所あるんだけど

「いいよ、どこ？」

「服を見に、透の選んだやつで…」

「え…わたしが選ぶの？」

「普段おしゃれな服とか着ないから、どれが流行りとか知らなくて…」

「ふーん…じゃあ頑張っちゃうから」

再会した時から思っていたけど、透は流行とかに疎い俺から見てもオシャレだ。

今日、透と会うことになつたからといって特別着る物を考えたわけじゃないけど、バスクウェアとかだらしない服はさすがに避けて選んだ。それでも透が来て隣に立つんだと改めて意識した時、やっぱりもう少し洒落ていた方がいいのかと思つてしまつた。透が気にしていないとしても、男として気にならないとはいかななかつた。それを口に出

すほど女々しくはないけど……」ういうのはバレたらなんか恥ずかしいんだろうな…  
「透くん、行こ。透くんと遊ぶの、私、楽しみだつたから」

## 二章 9話

9話

一緒に行つたアパレル店で透の選んでくれた服を買つてその場でタグも切つてもらひ、今っぽい装いになつてから他の店も回つていつた。

この辺りは俺が通学に使う駅とは反対側にあるからしばらく来てなかつたけど、随分と店舗のリニューアルが激しかつたようだ。子どもの頃に見た覚えのある建物の多くが開発の波を受け、真新しい外壁ばかりになつてゐる。

「ね、あのクレープさ、食べたくない？」

「…甘そうだなあ」

「ふふつ、そりやそうでしょ」

「いくか…無理だつたら俺の分も食べててくれ」

「えー…うん、いいよ。明日ダンスレッスンにしてもらおうかな」

甘かつた

けどどこか爽やかな味も見え隠れするトッピングのオレンジチップ

「こんなところに本屋で見てたのか」

「入る?」

「ちょっと涼んでいこう」

「あ、283の他のユニットの秋コートデ雑誌、出てるかも」

「他：アンティーカとか？」

「知ってるんだ」

「ちょっとはアイドルに興味持つようにしたんだ、幼なじみ達がいるんだし」

「へー…ね、アンティーカなら誰が好き？」

「…特にいないかな」

綺麗だった

柔らかく微笑む笑顔、試すようなアイドルの笑顔

「今度の撮影、海に行くんだ」

「夏らしいな、みんなで？」

「私だけだって、雑誌の撮影」

「撮影ってどんな風にやるんだ？でかいカメラとか使うのか？」

「えーっと、意外とそうでもないよ。思つてたより：コンパクト？」

「ふーん…『HOT LIMIT』みたいに撮るのかと思つてた」

「ふふつ…あれはあの人だけ…つ…ふふふ…くくつ…」

「知らなくて悪かつたな：」

涼しかった

商店街を背景にくだらない話で勝手にツボついている幼なじみ

「今日はありがと」

「こつちこそ：いつもオフデーは一人で過ごしてたから、まあ…」

「あ、そうなんだ。じゃあ、また行こうよ」

「……ああ、また」

「うん」

「じゃあ」

「うん、じゃあね」

この気持ちは、なんだろう…?  
いつも一人だった休日を一緒に過ごしててくれた透

そうか、寂しかったのか

だから今日はいつもオフデーに感じていた寂しさを感じなかつたんだ  
寂しくなかつたから、特別な休日つてことを忘れていたんだ

その一日にバスケがなくとも、透と過ごした一日は大切な一日なんだ

俺の幸せはバスケだけ

でも今日の透とのデート？は確かに楽しかつたんだ

あの日は俺からバスケを奪つてくる

あの日のミスを忘れたのか

あれはもう終わつた いつまでもここに居続けることはできない

進まないと

俺はあの半透明の泉の先を知りたいんだ、透が透明でいられなくなつた先を

迷つてないで

一直線に

『透』  
『でさ』

『……ん? なに?』

『今度は少し遠いとこにも行こう。鎌倉とか、江の島とか』  
『……うん、いいね、それ。箱根とか行つてみたい』

『千葉の方にも綺麗な自然があるつてさ』

『へー……透くん』

『ん?』

『行けるとこ、全部行こうよ。二人でも、みんなでも』

『……ああ、いいな、それ。全部行くか』

涼しい夜風も今は夏

一緒に浴びた熱と混ざつて、俺たちの隙間を埋めていく

## 二章 10話

10話

シェイクを飲み込む  
…ダメだ、甘すぎる

「そんなあからさまに甘そうなもん無理しなくても…」

「…なんか飲みたくなつたんだ」

「久我も甘味の良さがわかつてきたか！」

「いやあこいつの顔そんな美味そうには見えねーけどなあ…」

「甘いぜ紺野オ…いや甘くねえな紺野オ…」

「なに言つてんだこいつ」

久しぶりの授業、バスケ漬けの夏に慣れてしまうと自分がまだ学生だと忘れそうだ。

「甘味つてのはこうやつて渋い面して飲むのが通つてもんなのさ…」

「鷺、お前後ろのJK見てみろや」

「ああ？…おお？…笑顔が眩しい？」

「どう見てもあつちの方がいいだろ」

「なあ鷺崎：なんかトッピングでビターチョコとかないのか？」

「おお、あるぞ！久我はビター派か、悪くねエな！もらつてきてやるよー！」

「シェイクにチヨコチップつてストロージャ飲めね—じやん…」

こうして放課後に男三人でファーストフード店でダラダラする…俺たちには珍しい青春の1ページになりそうな光景だが、実は俺が紺野と鷺崎を誘つて出来たものだ。

鷺崎が何故かノリノリでトッピングを取りに行つたところで、紺野がボソッと声を出す。

「一緒に飲むために頑張つて克服してんの、可愛いじやん…なあ？透くん？」

「……」

バレバレだつた。

まあ鷺崎なんかにバレるより数倍マシだし、何故かこいつには知つていてもらいた

いつて謎の信頼感みたいなものもある。

「夏に少しいい方向に変われたみたいだし、よかつたわ」

「…お前の言葉が助けてくれたよ」

「そりや光栄だ」

「ま、インハイも終わつちまつて、こうのんびりすんのも久しぶりだよなあ…」

そう、夏の高校総体、通称インターハイは全国ベスト16

うちの部史上初の全国出場、ベスト16という大きな結果を残した

もちろん全員その結果に満足しきつて いる訳がない、負けて残した結果だ。

それでも東京ベスト8常連止まりだつたうちが、去年の東京ベスト4を超える成績を残したことには監督も誇つていいと言つていた。

高校の校舎の壁に垂れ下がる水泳とテニスの全国出場の文字の隣に、同じようにバスケ部の全国ベスト16の大きな文字が垂れ下がつており、始業式にキヤブテンが高校校長から表彰を受けていたのを、周りからの称える声に恥ずかしさを覚えながら見てい

た。

俺自身も都の準々決勝からコンディションを高く維持し続けられたこともあつて、ゲームメイクに冴え渡るものを感じていた。

都の決勝では残つた時点で全国への出場は決まつていたので、勝敗にこだわり過ぎずには仲間たちと大いにバスケを楽しめていたと思う。特に4ピリ最後の点差の競り合いによるタイムアウト合戦には会場が沸いていて、ネット上でも漫画のような展開だつたと大いに話題になつていたらしい。

全国大会では、やはりどこのチームも全国トップクラスのチーム。

途中で敗北したとはいへ俺個人としては多くの技術や動きをこの目で見て学べたので、結果以上の物を得られたインターハイだつた。

それに都の決勝の後：

『お疲れ様、全国出場おめでと。スポーツでこんなに盛り上がつたのは初めてかも』  
『透くんおめでとう！すごかつた！特に最後の10分はわたしもドキドキしたよ!!』

『透くん先輩おつかれ～～!! 雑菜、久しぶりに透くん先輩に会いたい～～!!』

『ちゃんと見てたよ、かつこよかつた。全国も頑張つて、応援行くから』

こんなにたくさんの中の言葉をもらったのは初めてだつた

今まで試合後に俺に言葉をくれるのはバスケだけだつた

試合に勝てばよくやつたと、負ければまだまだだと

それが練習にやる気を与えてくれるし、それを受け取れることが俺の幸せだつた

でも長めのオフデーをもらつた今、無性にバスケがしたい  
練習がしたい

全国で感じた壁を乗り越えるための練習がしたい

反省点を監督と相談して、早くチームで動き始めたい

そう俺に強く思はせているのが、今はバスケからの言葉だけじゃなくなつていた

客席からの応援

知つて いる人 から の 感想

知ら ない人 から の 評価

仲間 と 交わ し た 声

誰か から の 期待

俺は それら を 背負つて バスケ を して いた んだ と 気が 付い て いなかつた  
やつと 自覚 でき た

観客 から の 言葉 が 聴こえ て、

幼なじみ から の 言葉 を もらつて、

世間 から の 言葉 を 見て …

やつと 俺に とつて の 幸せ が、 ただ バスケ を する こと じや なかつた こと に 気が 付い た

“誰か の 言葉 を 背負つて 戦う こと”

それが 俺の 幸せ なん だ

だつて、受け取つた多くの言葉が…すごくうれしかつたから

だから透と再会したあの試合、あの時に俺は動けなかつた

ただひたすらバスケをしていたあの頃の俺は、きっと本当は幸せじゃなかつたんだ  
 あの透の目に込められた思いは今でも分からないけど、俺のバスケに何かを込めた目  
 を向けてくる人がいるという事に、あの時初めて触れた  
 知らなかつたその行動の意味を知りたくなつて、あの目を覗き込んで戻れなくなりそ  
 うだつた

「久我！ ビターーチョコなかつたからホワイトチョコチップもらつてきたぜ！」

「鷺お前バカじやねーの！」

「……つははは！ 鷺崎、それ、もううよ」

「透!?」

今はこれだけたくさん的人に支えてもらつていてるんだ  
 あの泉の先を覗いても、きっと平氣だ

大丈夫  
だつて、おもしろそうだろ？

# 三章 11話

3章 ニュアンステーマ 倉木麻衣「key to my heart」

## 11話

俺の仕事はアイドルの魅力を最大限に引き出し、それをコントロール出来るように導き、自分の翼で羽ばたいていけるアイドルにすることだ。

それは学校教育とは違う、スポーツ選手の育成とも違う。

魅力の引き出し方なんて星の数ほどあるのに、それでも引き出せないような秘められた魅力も存在する。そしてアイドルたちの魅力も千差万別：1人として同じ子なんていないのだから当然だ。

1人1人に最適な引き出し方を模索する毎日：

そんな無理無茶無謀な仕事に日々挑んでいるのも、アイドルたちの輝きを間近で見れるという役得のようなものを考えれば安いものだ。

たつた一人で数万、数十万、数百万：もつとたくさんの人間を魅了する彼女たちの力

：その助けになれる、そんな光榮な仕事なんだ。

彼女たちの魅力を引き出すためなら、法律の範囲内のどんな奇想天外な手段でも使つてみせる。

アイドルに害が及ばずに最大限魅力が引き出せるのであれば：

そう、毎朝自分を鼓舞するルーティーンをこなす。

今日も頑張ろうと意気込んだ俺のスマホにチエインが届き、

『あのさ、次の撮影に透くん連れてつちやダメかな。あ、一応知ってるよね？』

被つたPヘッドをデスクにぶつける勢いでヘッドバンキング。

「やつぱりお前か久我透ううう!!!!」

「フ、プロデューサーさん!? 大丈夫ですか!?」

午後の事務所、学校帰りの透と向き合って話していた。

「流石にダメだ、彼は関係者じゃない」

「まあわかつてたけど、そこをどうにか：さ、ダメ？」

「：彼とはこの前話したけど、怪しい真似をするような人じやないのは俺もわかってる。けどこれは透に依頼された仕事なんだ。撮影にはたくさんのスタッフが関わっている」

「……」

「ん：じやあ遠くから見てるだけなら平気だつたりする？」

「…………妥協するならそこまでだ。けどその場合、撮影が終わって現場が完全に撤収するまでは話しかけたり、目線をやつたりはしないって約束を守れるか？」

「うん。お仕事はきちんとやって、全部終わったら話しに行くから」

「……」

透の真剣な目を見て、俺は目を閉じて考え込む。

(本当は事務所に帰つてくるまでしてほしくはないんだけどな：俺が二人の関係にそこまで口を出すのも気が引ける。うちは特に恋愛禁止というわけではないけど：ノクチ

ルとしても透個人としても、やつと仕事を頂けるようになつたんだ…)

ようやく踏み出せた一步、ここでつまづいてなんかいられない。

自分はただの透の知り合いじゃない、浅倉透というアイドルのプロデューサーだ。彼女の人生をこの世界に、風の止んでしまつた世界に誘つたのは自分だ。

この世界を去ると告げられるその時まで支え続ける責任がある。

だが：

「透」

「ん、なに？」

「久我くんに撮影を見てもらいたい理由を聞いてもいいか？」

返答次第では断ろう。

そうなつた時は、透にもその意味が伝われば：いや、伝わると信じよう。

「今の私を見てもらいたいんだ。透くん、昔の私しか知らないと思うから」

「それは仕事中でないといけないのか？ライブや雑誌でも今の透は見れるだろう？」

「ダメなんだ、アイドルの私だけじゃなくて、今の“どーる”を見てほしい」

「そしたら私もわかるかも知れないから。どっち行けばいいのか、さ」

「…………わかつた。その代わりさつき言つた約束は必ず守つてくれよ？」

「うん、約束する。：ありがと、プロデューサー」

透は、変わろうとしているのか。

こうはつきりと自分を見てほしいと主張したのは、花火大会でのミニライブ以来か？

それに自分の行く先がわかるかも知れない、か：

アイドルが自分で変わろうとしている、それを邪魔するプロデューサーなどどこにいる。俺がやるべきは変化を邪魔することじやない、変化を誤らないように支えることだ。

## 『自分の意志で変わる』

それが本人たちにとつてどんなに大変なことか、今までのプロデューサーとしての経験の数だけわかっているつもりだ。それを自分から、変わりたいからこうしてくれと言つてくるように成長した透…さすがはノクチルのセンターだな。

「じゃあ久我くんには別で来てもらつてくれ、帰りは一緒に構わないから」「場所とかどうしよ…見えないところって言えばいいかな」

「まあ彼なら察してくれそうだし、撮影の邪魔にならない所、で大丈夫だろう」「ん、了解。じゃあ予定空いてるか聞くね」

「ああ」

「…ん？」

「？」

「…透、もしかして、今から誘うのか…？」

「え、うん。だつてこういうのつて先にプロデューサーとかに聞いた方がいいと思つて」「……はあ…透はやつぱり透だな…」

「え、なに」